
デス・ドリーム

ヨネ@ハイテンション

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

デス・ドリーム

【Nコード】

N9318D

【作者名】

ヨネ@ハイテンション

【あらすじ】

こんちくしょう！あつあつの米をぶつやがって！俺はアツアツのトンカツを投げ返す！まさか・・・そんなくだらない夢が・・・世界を混乱のるつぼに落とそうとは・・・

何の脈絡もなく、父親に炊き立ての米の塊をぶつけられた。

「なんだよ親父！ 食べ物粗末にするんじゃないよ！」

俺は親父に向かって叫んでみたが、親父はニヤニヤ笑うだけ。

そのニヤニヤ顔のむかつく事むかつく事……

ともかくにも、あの親父の目ん玉にカラシ塗りつけてヒューヒュー
言わせてえ！！

てか、死んで欲しい！

もういやだもん！

そう思っていると、親父は俺にコロッケを投げつけ

さっき以上のニヤニヤフェイスでこちらを見るのであった。

そんな夢を見て目を覚ました。

夢オチかよ！

そんな突込みがどこからともなく聞こえてこない訳ではない。
しかし、本当にそんな夢を見てしまったんだから仕方がない。

目覚めてすぐさま、ボロアパートの辺りを見回す。

良かった

ご飯粒もコロッケも散乱していない。

部屋が無事なのを確認してほっと一息。

しかしよくよく考えるとなんだかムカムカと腹が立つ。
よくよく考えて御覧なさい。

親父にご飯の塊とコロツケぶつけられてニヤニヤされる夢。

こいつは地味に嫌な夢ランキングのベスト10に入るといっても
過言ではない！

しかしひとつ残念でならないことがある。

どうして

どうして俺は

親父の顔面めがけてご飯を！

それも炊き立ての熱々ご飯を！

時速160キロの剛速球で投げ返してやらなかったのか！

いやいやまって

ご飯よりも、揚げたてのトンカツのほうがよりダメージを与えら
れるかもしれん。

もちろんソースとカラシをたっぷりぬったトンカツだ！

ああ、投げつける時に飛び散る衣！

緩やかに回転しながら飛んでいくトンカツ！

まさに芸術！

美の極致

はっ

いかんいかん

俺は一体何を考えているのだ……

あれだな

寝起き特有の意味不明状態
俺語で言つと頃の『ホゲホゲ状態』
ゆえに仕方ないだろう。

ホゲホゲ状態の脳も、やっと活動をしだしてきたころ。
俺は夢のことが少し気になって、実家に電話を試してみた。

電話に出たのは母親だった。

まあ母親が電話に出るのはいつものことだ。

うちの父親は電話に出たがらない。

仕事の電話があつても、出たがらない。

携帯なんかを発明したやつを殺してやりたい！

などとブツブツ言っていたのを聞いたことがあるほどの電話嫌いだからだ。

話が横道にそれちまった。

電話に出た母親の態度がおかしい事にすぐ気がついた。
声が震えているのだ。

「どうした？　なんかあつたの？」

「お父さんが、お父さんが死んだの……
目にカラシを塗りたくつたあと死んだの……」

母親は正気を失つた声でそれだけ言つと、そのあと黙り込んでしまった。

死んだ？

しかも、よりもよつて目にカラシを塗つた後で？

一体全体どういう死に方だ……
手首を切るならわかるが、カラシを塗る……
親父が死んだシヨックより、その事が気にかかって仕方がなかつた。

まさか、まさかだけど

俺が夢の中で思ったとおりのことが、現実の親父に起こった。
なんてこと……

ま、まさか、漫画や小説じゃないんだからあるわけないよな！

俺は何も考えない事にした。

次の日、俺は実家に帰り通夜に出た。

力ない母親の肩を俺は支えてあげていた。

通夜を終え、俺はボロアパートに帰ってきた。

母親についていたかったが、俺にも仕事や生活というものがあるのだ。

まあ実家には妹がいるし、なんとかするだろ。

とにかく疲れた。

俺は布団にもぐりこむや、一瞬で眠りの世界へ落ちていった。

夢を見た。

会社の嫌な課長が、指からミサイルを発射してきたので俺は颯爽と回避した。

しかし、課長はおもむろにYシャツをめくると

さながら裸踊りを踊るような格好で、デベソからレーザーを乱射した。

俺はそのデベソを引きちぎってやった。
課長はピクリともしなくなった。

目が覚めた。

なんていうか、夢ってのはホントに何でもありなんだな。
そう思った。

ふと目覚ましに目をやると、見事に遅刻の時間だった。

俺は急いで身支度を整えた。

「いやあ、昨日通夜で疲れ果ててしまいました、ついすっかり……」

そんな上司への言い訳の台詞も三回ほど練習しておいた。

しかし、俺のこのいい訳台詞の練習は無駄に終わった。

なぜなら、言い訳するべき相手であるところの上司がいないのだから。

正確に言うと

もつこの世にいないのだから。

会社に着くと、会社はひどく荒れていた。

散乱する書類、煙を上げるPC

よくみると壁も穴が数箇所開いている。

「一体なにがあつたんだ？」

恐る恐る俺が同僚に聞いただしてみると

同僚は青ざめた顔でこう言った

「いきなり課長が服を脱ぎだして……
か、課長へ、へソから……
レ、レーザー撃ち出して……
そ、そのあと自分でデベソを引きちぎって死んだ……
アハ、アハハハハハハハハハhshhシヤh」

同僚もそのあと救急車で運ばれていった。

軽い精神錯乱状態になつたのだろう。

なるほど、課長はへソからビームが出せる男だつたのか。

さすが課長になるほどの男はへソからビームくらい出さないと
けない。

そうすると部長レベルだと、腕からビームサーベルくらいは楽々
出すに違いない。

俺の脳は軽い『クルクル状態』におちいつていた。

『クルクル状態』とは俺語で現実逃避状態の事である。

断じてクルクルパーになつた訳ではない！

ともかく、俺の遅刻は誰にも怒られる事はなかった。

こうなると2度ある事は3度あるなのである。

次の日に見た夢はこうだ。

巨大ロボットになった三丁目の駄菓子屋のおばあちゃんが
都庁を椅子代わりに腰掛けながら

「はい、おつり300万円ね」

と得意のおばあちゃんギャグをかまして上機嫌だったのだが
いきなりおっぱいをふりまわし
都庁もろとも自爆した。

そうか乳首が自爆ボタンだったのか……
俺は同でも良い事に感心していた。

目が覚めると

都庁が爆発していた。

近くには全長200メートルのおばあちゃんロボの残骸も散乱し
ていた。

もうわかってしまった。

わかりたくなどないけどわかってしまった。

俺の夢は現実になる！

しかもホントどうでもいいような夢が現実になる！

ならばどうする……

俺はどうすればいい？

寝なければ夢は見ない！

うむ、確かに正論だ。
しかし、寝なければ死んでしまう！
これもはなはだ正論だ。

そして結論は出た

俺は死にたくない！！

そんなこんなで夢は毎日見続けた。
おかげで今は世界地図すら書き換わるほどの大惨事が毎日のように起こっている。

アメリカのとなりに北朝鮮があるわ。
月にはウサギが住むわ
火星人はほんとにタコだわ
イケメンでモテモテだった嫌な奴のチンコがミサイルになってア
ンドロメダまで飛んでいくわ

大きい事から小さい事まで
ありえない出来事がごく当たり前のように起こる世界が誕生した。
そう、俺はもう神と同じような存在なのだ。
新世界の……..
もとい夢世界の神なのだ！

デス・ドリーム

「つて夢を見たんだよ？」

喫茶店で俺は友人に長々と語った。

「お前、そこまで話しておいて夢オチかよ！ ほんとばかじゃねえの！」

友人は俺をせせら笑うと

「こんなつまらない話に長々と付き合っただから、ここの勘定はお前もちな」

そついい残して去っていった。

その夜夢を見た。

友人の頭からモヤシがはえる夢だった。

俺はアイツの股間にもモヤシがはえているんだろうか？
そんなどうでもいい疑問にとらわれた。

俺は目覚めてすぐさま友人に電話をした

ワクワクしながら

おしまい

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9318d/>

デス・ドリーム

2009年3月24日12時05分発行